村上忠順翁顕彰会報

上つ枝の花の雫にうるほひて
下枝の蕾香に匂ふなり

村上忠順翁顕彰会会報 第17号
編集　村上忠順翁顕彰会
発行　平成18年４月30日

～～～ 目　次 ～～～

・村上忠順翁を通して
　郷土を見つめ直す …… 2
・歴史探訪 …… 3
・村上忠順をめぐる人々
　『萬延百人一首』と石川千涛 … 4

写真提供（梅）：仲村　斉

村上忠順翁を通して郷土を見つめ直す

村上忠順翁顕彰会 会長　近藤光良

村上忠順翁顕彰会も発足以来十七年となりました。先輩諸氏の努力や自治区の方々の協力もあり、何とか継続できております。残念ながら村上忠順翁に対する認知度はまだまだ低いのが現状です。子どもたちに限らず、大人に「村上忠順を知っていますか？」と聞いても多くの方たちから知らないという返事をいただき、さびしい思いをしています。

刈谷市の図書館には「村上忠順文庫」という立派な一室があり、そこには翁が集めた本、執筆した文書など三万冊余が収められています。その中には、江戸時代の貴重な本も多くあり、日本の江戸末期の文化を研究する上で非常に貴重な存在となっており、国内は勿論のこと海外の学者からの問い合わせがあるそうです。高岡町の村上家にも忠順が記した文書が残されており、こちらにも国内の学者からの問い合わせ等があると聞いております。（一部は高岡町の六鹿会館で常設展示をしております）

医者であり、国学者であり、そして著名な和歌の指導者であり、更には尊王攘夷の支援者として活躍した郷土の偉人を、一人でも多くの方々に知っていただき、田舎ではあったけれども忠順翁を輩出した郷土に対する誇りを持っていただきたいと思っております。

顕彰会はこれまで忠順翁の常日頃の実像に迫ろうと彼の残した歌集や日記を刊行し、また彼が旅したであろう地域を「歴史探訪」と銘打って巡って参りました。日記や歌集については私たちの江戸時代末期に対する知識の薄さや、和歌を解する心のなさから、なかなか忠順翁の実像に迫れないもどかしさを感じております。そんなこともあり、平成十七年度は、愛知教育大学名誉教授の新行紀一先生に忠順翁の記した日記「座右記」の解読をお願いいたしました。先生は快く引き受けて下さり、四回にわたり「四方樹（よもぎ）大学」の中で講義をしていただきました。講義では、私たちの江戸時代に対する知識の少なさから、時代の解説に時間を割いていただいたため、日記のほんの一部しか解読できませんでした。しかし、村上忠順翁を知るとともに、当時の文化、地域の状況などを知る上での大切さや面白さを味わう機会にもなったと思います。四回の講義は貴重な内容であるため、講義録を叢書第七として刊行することとしました。

また、永年、市の視聴覚ライブラリーにお願いしてきました村上忠順翁のアニメが、郷土の偉人シリーズ第四作目としてこの程完成しました。時間は二十分という短時間のため、忠順翁のほんの一端しか紹介できていませんが、忠順翁の全体像を知る上ではよい教材が完成したと感謝しております。このアニメを一人でも多くの子どもや大人たちに見てもらい、郷土への関心と誇りを持っていただき、子どもたちには忠順翁を乗り越える人になってもらえれば幸いと考えております。

これからも村上忠順翁顕彰会に対する皆様のご支援をお願いいたします。

歴史探訪

名古屋ぶらり厚田紀行

中野　明子

「名古屋へは四十年あまり行きかひつれどいとなくして何処にもえ物せざれば」に因んで名古屋めぐりをします。というご案内をいただき参加させていただきました。十月二十九日午前九時出発にて、名古屋を東から西へ見聞します。

忠順は二泊三日の旅で、帰宅後は二日ほど平臥とありますので、忠順は旅した維新前の世相についての詩で当時を思うのみです。

はてはてハ　いかになり行く
世なるらむ　たびゆく人も
なしとこそきけ

しっとりと小雨降る中出発しました。今日のために用意していただいた栞「名古屋ぶらり厚田紀行」の説明を聞き、添付の名古屋周辺地図（明治二十年）を手に忠順が詠んだ音聞山はどの辺りかと眺めるうちにバスは境川を渡り八事山興正寺へ三十分程で到着しました。

ないりそと　しるしたてたる
かひもなし　姫ゆりにほふ
八事山かな

詩にも詠まれた女人立入不可の八事山です。本堂において参加者全員和尚から興正寺の由緒、境内の説明をしていただきました。

続いて私たちは忠順が成し得なかった見聞コースへ進みます。名古屋市旧貞奴邸は、街が博物館の面影を残す路地や長屋の一角に静かに建っていました。昼食は午前中最後の日程地、トヨタテクノミュージアム産業技術記念館内です。エントランスロビーでシンボルの「環状織機」に目を奪われました。展示場の繊維機械館内では「紡ぐ、織る」技術を初期の道具から機械、現代のメカトロ装置を実演を交えて紹介してあり、ここにおいても時代の変遷を感じ、再訪を胸にバスに乗りました。

旅の最後は長良川水辺の「なばなの里」での散策です。小雨もあがり、花ひろばで「ダリアまつり」で咲き誇る色も大きさも多種のダリアを楽しみ、足湯につかり心も身もほこほこと無事帰宅。ありがとうございました。

八事山興正寺にて

歴史探訪に参加して

早川　敏秋

歴史ある顕彰会は、事務局及び会員の熱意により充実した内容が企画され参加の恩恵に浴することができました。今年は「名古屋ぶらり厚田紀行」の日帰りバス旅行となりました。当日は雨にたたれましたが、それなりに風情を味わうことができました。

最初に拝観したところは八事興正寺でした。僧侶の親しみを込めた案内が印象に残りました。当時、忠順翁は、街道筋であり名古屋の入口に位置する由緒あるお寺だけに興味深かったのだと思います。

次の訪問地は、明治初期に活躍した日本最初の女優川上貞奴の住居二葉御殿です。以前、聞いたり、テレビで見たりしましたが、復元の実物を目の当たりにして、当時として、相当思いきって建築したものだと思

産業技術記念館にて

います。恐らく貞奴女史は、西洋で見聞した文化を、なんとしても伝えたい願望が発起させたのではないかとも思います。

その後、栄生にある産業技術記念館を見学することができました。以前より噂に聞いておりましたが、実に整然と展示され、動きも同時に見聞することができ感動させられました。食後は、木曽三川の下流に「なばなの里」を散策して、夕暮れ時、第二東名でなんと四十分足らずで我が家に辿り着くことができました。

当日辿った道程を、当時に、つまり江戸末期、明治初期にタイムスリップして探訪の旅をしたとしたら、どのような感慨に耽ることができるだろうか。当時は大きな変革激動の波が押し寄せている時代に思えます。そんな世相だけに、忠順翁も貞奴女史、そして佐吉翁も敏感に世相を感知し、当時の世に何が大事か考え自分のできうる範囲の最大限の情報発信をされた先駆者であったように思われます。

当日探訪させていただいた事実が全て物語っている先駆者の偉業を再認識し、これからの余生の生きる道しるべとして、心していきたいと思います。

村上忠順をめぐる人々

『萬延百人一首』と石川千涛（ちなみ）

中澤伸弘

村上忠順の旧蔵書の多くは、刈谷図書館の村上文庫に収蔵されてゐるが、忠順の身近にあつた書物は、まだ村上家に収蔵されてゐる。ここに紹介する『文久百首草稿』と題する一冊もその中のものである。

『文久百首草稿』（題簽名）は千家尊澄以下全百十七人の歌を諸書から書き抜いたもので、その文字は忠順の字であると思はれる（但し巻末には別人の筆もある）。一人当り約十首（多い人は十五首程、少ない人は一首のもある）を抄してあり、歌の肩の所にその出典の歌集名が略号で記されてゐる。その歌集は

清（熊代繁里　清渚集）
鴨（長澤伴雄　鴨川集）
詠（鴨川詠史集）
青（秋元安民　青藍集）
安（西田惟恒　安政年々集）
武（仲田顕忠　武蔵野集）
春（物集高世　春草集）
鶯（本居豊穎　鶯蛙集）
玉（忠順　玉藻集）
八雲（中山琴主　八雲琴譜）
信（惟恒　信恒翁十三回歌）

十一種の先行歌集である。これらは出板されて広く流布したので忠順はそこから抄出したのである。他に尾張桂園派の伊部義成の歌はその『榊園百首』、殿村茂済はその『安政五午年月次朔支于詠』から採つてゐる。この二冊は忠順の手許にあつたのであらう（『榊園百首は』村上文庫に現存してゐる）。

それにいま一つ「新」と肩に書かれた歌を採られてゐる人々が二十七人ゐる。遊妓桜木の歌など全て「新」である。この「新」は忠順が編んだ『新草集』で、その草稿が刈谷の村上文庫にある。『新草集』は村上氏蔵板と刷られた罫線用紙に巻頭には木村千齋の「舊年立春」から、巻末には物集高世の長歌に及ぶかなり多くの人々の歌を集めたものであり、忠順はこれを編輯して出板する意図があつたものと思はれる。草稿に「新」とある市岡和雄の「元日暁」、寺山吾曇の「太刀」の歌、中山琴主の「八雲琴」や桜木の歌など、みな『新草集』に見えてゐる。忠順が『新草集』としての出板を止めたのは何か理由があつたのだらうが、その草稿を無駄にせず、この『文久百首』の歌稿として抄出したのであつた。かうなると『新草集』は文久以前に編まれてゐた事となる。

また『文久百首』は故人の歌を採らない事を編輯方針とした様である。例へば越後五泉の泉圓の歌稿には、忠順の字で「古人也」と符箋が貼られてゐる。また伴信友の歌稿にも「信友古人也　信近ハ現存也」、夏目甕磨にも「古人」と記されてゐる。

『文久百首』はこの様に歌稿を抄出して綴つたものの、一本にまとめる事もなく、草稿のまま今に残つたが、問題なのは、この巻末に綴られてゐる『萬延百人一首』である。

『萬延百人一首』は『新草集』同

様の、村上氏蔵板と記された罫線用紙に、深見篤慶の序文、石川千涛の跋文をそなへ、千家尊孫の「立春」以下、香川景恒の「寄道祝」に至る当時現存の百人の歌が一首ずつ記されてゐる。文字は忠順の字と思はれるものである。この百人一首に収められた百人の歌は、実は『文久百首草稿』に全てある歌で、この草稿から採られた事が明らかである。但し年次の順でゆくと、萬延の次が文久なので、萬延の百人一首を撰んだのち、同資料（歌稿）をもとに更に『文久百首』をまとめるつもりでゐた事がうかがへるのだが、いかがであらうか。

『萬延百人一首』は序、跋もあるので出板の予定でゐた模様である。序文に深見篤慶は次の様に述べる。

しるしらぬ人の歌ども見ゆくま、に反古のはしにかいつけおけるを　ひと日雨いみじうふりてさしいつべくもあらねばいとつれづれなるま、に　とりいでてかぞふればも、たりなむありける　いとをかしくも有かな　いかでさう書あらためばやとおもふ〜くりかへすをりしも　友なる石川千浪（ママ）しとゞにぬれて来たり　か、るをりこそむつたまあへるふる事まなびの友などありな　といひつつとう出て見すれば　いたくほめておなじくは百人一首にならひて　歌ひとつづ、さだめて人にも見すべくものしねといへば　げにといひつ、かたはしよりかきこ、ろむ　いくほどもなくかきはてたれば其人々のすがたさへにか、まほしうなりぬ　されどえもかきあへねば許より（虫損）へむなどいひしらぶほどに雨もをやみ日もくれなむとすれば　千なみかへらむといふしばしとゞめてこれに名付けおやになりねといへば萬延百首とうはかきしてかへりぬるは此書になむ

萬延元年十月　　深見篤慶

これによると歌稿は深見篤慶の手許にあつて、雨の降る日に訪ね来た石川千涛が百首を撰び、名をつけたと言ふのである。序文を信じると、これは忠順の字ではないことになるのだが、同じ事を跋文で千涛は述べてゐるが、更に「みなをかしがりて桜木にといふ人もあれば　そもさる事にこそとて書肆にはからんとす　猶もれたる人もおほかるべけれど　こはかりそめのすさびなればさるえらびの有べくもあらぬにこそ」と記してゐる。千涛には出板する意図があつた事がわかる。折しも忠順の周囲では『玉藻集』の編纂刊行の事もあつたし、紀州の西田惟恒による年々百首をはじめ、全国に亘つて撰集の類題歌集が刊行されてゐた時代であつた。千涛は勿論その事を意識してゐた事であらう。そしてこれが出板されなかつたものの幸ひに村上家に残つた事は、斯様な歌集の編纂のあつた事実を今に伝へる事となつたのであつた。『萬延百首』は石川千涛の撰になるものである。

石川千涛（千浪とも書く）は忠順の門人で、その他に『三河三十六人撰』を編んでゐる。当時の三河歌人三十六人の歌を一つに纏めたものであるが、これは慶応四年に刊行された村上家に関はる歌集である『六華集』の中に収められてゐる。三十六人撰の末に鈴木重愛が「これの三十六首は千涛がありし世にものしたるなり」と記し、反故の中にあつたのを妻が見出して涙ながらに示したと言ひ、それをこ、に刊行すると言ふのである。「なきたまの心にかなはむや　あらじや」と結んでゐる。

同じく『六華集』には千涛の歿後、深見篤慶や成瀬広冬などが歌稿より百首選んで「蝉園集」と名づけた歌集が入つてゐる。篤慶も広冬も忠順の門下である事は今更言ふまでもない。「蝉園集」には忠浄の簡単な序文が記されてゐる。

石川千涛は岡崎の駅能見町に住みけるが若きころより磯城島のみちに志ふかく我父蓬蘆翁の弟子となりて家のなりのいとまには歌よむ事をのみこのみて……しかるをことし水無月の八日の日いまだ五十のよはひにもたらでとみのやまひにか、りたなこ、ろをかへすまもなくむなしきつゆときえにし……

これによると千涛は忠順門下で詠歌には随分の力量があつた事がわかるが、五十歳にも満たずに逝いた事は、忠順はじめ同門の人々にとつては深く嘆かはしい事であつたと思はれる。それゆゑ忠順編の『玉藻集』、『河藻集』はじめ『三熊野集』、『春草集』文久元、二年の七百、八百首にも千涛の歌が見

えてゐるが探せばまだあるかもしれぬ。

文久二年、忠順が五十賀を迎へた折には「讀書延齢」の題で、

萬代ものどかに経なむよのちりを
書の林のおくにかくれて

と詠み、師忠順の延齢を歌にして祈つたのであつた。

千涛が逝いたのはいつであつたのであらうか。『和学者総覧』が「名家伝記資料集成」を引いて慶応二年としてゐるが、これは慶応二年に刊行された『類題三河集』に、既に故人としての印がついてゐる事によるのであり、正しい歿年ではない。先の追慕の歌群の中に寺部宣光の歌があり、その詞書に「閏五月の末つかた石川千涛がせをそこしけるそのかへりごと……」と題する歌がある。閏五月の末に千涛の手紙が来たので返事を書いたが、その返しは訃報だつたと言ふ題である。千涛の死は「とみのこと」であり、急逝であつた。閏五月があつたのは慶応元年であり、千涛の死はその年の六月八日であつた事がこれで明かとなつた。忠順よりは十歳ほど若かつたのであらう。

『萬延百人一首』に撰ばれた忠順の歌は、

美人對月
手弱めのをり〜たゆむ琴の音は
かげさす月に心ひくらむ

であり、『文久百首草稿』のこの歌の肩には出典は記されてゐないので、これは新出の歌かもしれない。この百人一首には当然の事ながら撰に関与した千涛や篤慶の歌はない。千涛といふ名にはエドと記してあるがこれは江戸の加藤千浪の事である。

ところで撰ばれた百人の歌人にはどの様な人物がゐるかを雑と記しておかう。地域別にして目を引くのは出雲の歌人群で千家尊孫・尊澄・尊福・尊茂・尊晴・之正、北島全孝、佐草文清・美清、島重老・重胤、中言林、手銭さの子、別火吉満の十五名である。京では香川景恒・景嗣、熊谷直好、倉谷友于、渡忠秋などの桂園派、蓮月、式部、また大国隆正や岡部春平、遊女桜木などの名も見える。一統一派に偏してゐない事はこれでもわかるが、桜男や東雄の歌があるのも特徴的である。江戸では井上文雄、草野御牧、加藤千浪、清水謙光、前田夏蔭、鈴木重胤、橘冬照、久米八十子などが採られてゐる。仲田顕忠の歌があるが、顕忠は安政七年二月、即ち萬延と改元になった年に逝いてゐるので本当は故人なのであるが、それを知らなかつたのであらうか。但し、忠順と面識のあった小林歌城がゐないのは不審である。紀州歌人も多いが安田御年、熊代繁里、山内繁憲、本居豊穎、西田惟恒等が見える。大坂では佐々木春夫、萩原広道、因幡では小谷古蔭、中島宜門、吉備の藤井高雅、防長には近藤芳樹、五十君夷守や鈴木高鞆、九州では物集高世、西田直養、中島広足・広行などの名が見える。尾張では植松有園・茂岳、氷室長翁、市岡和雄等が見える。地元三河では忠順、岩上登波、中野清風、酒井利亮等である。これを見ても当時の歌人を全国から採つてゐることがわかり、その目配りの様子がうかがへる。

歌稿の中から歌を撰んだのは千涛であつたが、百人を越える歌稿を、反古紙にとは言へ書きつけておいたのは深見篤慶だつたと言ふ。篤慶の妻、登之は忠順の娘であり、篤慶は忠順の門下であり、また娘の夫でもあつた。当然歌に対する造詣もあつたらうが、この歌稿をまとめたのは忠順ではないだらうか。『新草集』から歌を抄出するのは、やはり忠順でないと不可能な事であつたのではと思はれるし、字体も忠順の字である（巻末の追加は篤慶かもしれぬ）のだ。忠順は自詠の歌を、父母や幼い自分の子供の歌として、歌集に載せる事があるとは、既に熊谷武至氏の指摘する所であり、ここでも自ら関与したものの、篤慶と千涛の合作の様にしたのは、敢へてこの百首に自詠の一首を何ら憚りなく収めるためではなかつたか。自らの歌を百人一首のうちに収める事はあまりにも謙虚さを欠くとの思ひがあつたのであらう。さう思ふとこの百人の人選は、当時の忠順の全国歌人に対するまなざしとなるのであり、出雲歌壇の歌人の多い事も、その交流のあつた事として肯かれるものである。

編集後記

村上忠順さんがアニメになって登場しました。このアニメは視聴覚ライブラリーの手で制作されたもので、上映時間は約二十分間です。六月三日の顕彰会総会で上映します。お楽しみに。